ともに前へ ⑯④

被災地の母親支える

NPO法人こそだてシップ（大船渡市）

大船渡市のNPO法人こそだてシップ（伊藤怜子理事長）は、仮設住宅や自宅へ出向き妊婦や母親を支える「赤ちゃん訪問」に取り組んでいる。

出産できる病院が一つしかなく、地域に助産院がない気仙地区で、東日本大震災後、地元助産師有志やボランティアが始めた訪問事業。車の流失、実家からの転居、生活環境の激変―。被災地で厳しい環境にあるママたちを支え続けている。

同市猪川町内の仮設住宅付近の集会所に26日、平成生まれの若い母親4人が集まった。

同法人のメンバー4人は、手慣れた手つきで赤ちゃんをだっこし、体重を量る。「成長曲線通りだから大丈夫」。母子手帳を手に母親に語り掛けた。

「ミルクはどうしてるの」「嫌がらない歯磨きの仕方はこうするのよ」。母親の相談にプロの視点で丁寧に応える。歌に合わせて赤ちゃんの手足を動かす運動も一緒に楽しむ。

訪問事業は、月に1回、2日間実施。「また会おうね。また大きくなってるかな」と言ってお別れ。集まった時より、母親たちの表情は和らいで見える。

■親身な相談

この仮設住宅で、夫と長男颯煌ちゃん（10カ月）と暮らす主婦金野生香さん(24)はほぼ毎月利用。「子育ての仕方で相談したいことはいっぱいあるのに、病院は待っている人も多く、先生にはじっくり相談しづらい。集会所にも出向いてくれる。また、自宅も訪問。普段の生活状況や家族関係が把握しやすいほか、家にある布団やタオルなどを使った寝かせ方など、より実践的なアドバイスができるという。

メンバーの一人で、東京から訪れている助産師渡辺寛子さん(59)は「子育てはどの地域でも大変だが、この地の母親はさらに家族や家を失った悲しみを抱えている。赤ちゃんの笑顔を見て、お母さんが話したいことを話して、ほっとしてほしい」と思いを込める。

■訪問息長く

同法人は、震災前から母子相談を行っていた任意団体が前身だが震災を機に活動を本格化させた。

伊藤理事長は「厳しい中でも、子どもたちは生まれ、育っている」と考えたという。長年にわたり生命誕生の瞬間を支え、出産の苦しみと喜び、命の尊さを肌で知る助産師として、立ち上がらずにはいられなかった。

2011年5月には同市内のショッピングセンターに母子相談室を開設、9月からは同市と隣前高田市のホールに母子が集まる「サロン」を始めた。

それでも「サロンに来られないママ友がいる」と言われた。震災の影響や、家族の理解が得られず、外出できない母親が多くいたためだ。相談できるママ友と離れ、孤立している人もいたという。

伊藤理事長らは仮設住宅を回り、子育て世帯を訪ね歩いて実態を探った。12年5月から訪問事業を始め、信頼関係を築いている。

これまでに訪問事業は延べ数百人が利用。伊藤理事長は「困った時に、ふと心を預けられる存在でありたい。母親に教えを説くだけでなく、自分自身で答えを見つけられるよう、ぽんと肩をたたいてあげられる支援を続けていきたい」という。復興後の未来を担う子どもたちの成長に、そっと寄り添っていく。

サロンや、訪問こそだてシップに関する問い合わせは同法人0192・27・9839か090・6229・9839へ。

子どもと一緒にできる体操を楽しむこそだてシップのメンバーと親子。訪問型の子育て支援が母親たちの力となっている

応援メッセージ

会話で気持ちが楽に

大船渡市赤崎町　主婦　鈴木沙也加さん(24)

子育ては疲れることも多いし、子どもと一日中家にいると出かけるのもおっくうになりストレスがたまる。訪問こそだてシップは、自分より年上の先輩の子育て経験や、専門の人と気軽に会話ができて助かる。ママ友だけで集まって話し合っても、答えが出ないことが多いが、参考になる。力を抜いてもいいんだなと思えるし、あしたからも頑張ろうという気になれる。

鈴木沙也加さんと(左から)陽巽(ひまり)ちゃん、陽翔(はると)ちゃん